

どの世界の歴史でも中庸を賛美しない人はいない。正しい行為であっても極端に走るのは、政治だけでなく日常生活でも鬱陶しいものだ。

すでに孔子も『論語』（金谷治訳注）で指摘していた。この「中行」、つまり中庸の人を見つげられない場合はどうなるか。ここで孔子は、せめて「狂者」か「狷者」に頼れとい

歴史の交差点

武蔵野大特任教授 山内昌之



るなかれ。ほどよく賢くなれ」というモンテーニュの好きな言葉は、日本人の耳にも心地よく響く（『エッセー』30章）。しかし、穏やかで中庸を弁えた人びとを世の中に求める難しさは、

うのである。「狂者は進みて取り、狷者は為さざる所あり」。現代人が字面から連想する意味とは違い、この場合の「狂」とは積極進取

みがちの意味ではないか。そこで、置つけが低くなるようだ。で、この文章の意味は、「狂」の人は大志を抱きながら進んで求めるし、「狷」の人は節義を守って出過ぎた振る舞いをしな

この4つの類型は、江戸時代でもしばしば人間評価の基準として用いられた。水戸学の大東湖が言うのは政治でも「狂者」や「狷者」には逢いがたく、郷原の勢力が強いというのだ。郷原が政治に際立つことはなく、少しづつ良い人を用い、少しづつ良いこともするので、世間も自分も善政を施しているかのよう錯覚する（『壬辰封事』）。

政治家の4つの類型

指導者になるほどの人物は、①をもち、自分もそれで良いと信じている人びとのことだ。中行つまり理想の存在として中庸を保つ人物、②「狂者」すなわち元気がよく志も言語表現も大きな人物、③「狷者」という、不義の行為を恥じて実行し

家規模に通用するとはかぎらない郷原とは違つた。見かけは、「狂者」や「狷者」より優れていそうであり、行いには批判されるべき要素もなく、廉潔がましい。そこで世間はだまされ、自分もひとかどの人物だと

（やまうち まさゆき）